

出題分析		
試験時間 90分	配点 100点	大問数 1題
分量 (昨年比較) [減少 <span style="border: 1px solid black;">同程度</span> 増加]	難易度変化 (昨年比較) [易化 同程度 <span style="border: 1px solid black;">難化</span> ]	
<p><b>【概評】</b></p> <p>出題形式は例年通り本文要約と意見論述の2問構成で、本文の分量も昨年並みだが、文章の難度が高くなった。本文はAI論の文脈の中で「自然と技術(アート)」の関係について考えるという重層的な構造を持つ文章であり、話題を掘り下げるために美学の古典として近代の哲学者カントの難解な技術論が取り上げられている。昨年はAI翻訳が可能となった時代において翻訳を行う意義や文学を読む意義などを論じた文章だったため、2年連続でAI時代の文学・芸術のあり方に関する課題文が出題されたと言える。今回の文章は、まず人工知能の発展の歴史と「知能」について考察した後、本論として「人工」という言葉が含み持つ意味を論じている。話題が多岐にわたるため本文要約の際はバランスに注意したい。設問Ⅱの論述テーマは「自然と技術(アート)」の関係について論じるものだが、AIをある種の芸術として捉える筆者独特の視点を踏まえて論述を行うのは、受験生にはかなり難度が高かっただろう。なお、出典の吉岡洋『AIを美学する』は2025年11月実施「慶大入試プレ」の文学部の小論文問題で課題文として使用した。</p>		

設問別講評			
問題	出題分野・テーマ	設問内容・解答のポイント	難易度
一	本文の要約問題1問(300字以上360字以内)、意見論述問題1問(320字以上400字以内) 出典…吉岡洋『AIを美学する』より	本文は人工知能の発達の歴史をたどるところから始まり、続いて「人工知能」の概念のうち「知能」の一般的イメージとその無効化を指摘しているが、ここまではいわば前置きに過ぎないため要約の際は軽く触れるに留め、本論となる「人工」の意味について重点的に書こう。筆者はカントの技術論をふまえて、自然と技術は必ずしも対立するものではないこと、あたかも自然の産物のように見える技術(=芸術、ファイン・アート)があることを指摘する。そのような視点から、AIも自然の所産として、あるいは芸術活動として見なすという結論に至る。このように、本文はAI論と「自然/技術」論が絡み合う複雑な構造となっているため、要約は骨が折れただろう。設問Ⅱでは自然と技術の間に何らかの連続性を見出すことのできる例を挙げることができるとよい。古来の自然エネルギーや、自然との調和を目指す先端技術、自然との一体化を志向した詩歌といったアート・テクノロジーの例を考えよう。	難

#### 合格のための学習法

慶應義塾大学文学部の小論文は、文章読解力、自分の考えを作る思考力、それらを限られた字数内でまとめる表現力を試すオーソドックスな問題である。設問意図も把握しやすいので、日頃の小論文の勉強の成果がきちんと反映される問題となっている。対策としては、まず読書をおすすめする。言語、文化、社会、科学など様々なテーマの本を幅広く読み、筆者の問題意識や主張、それに対する自分の考えなどを文章化してみるといいだろう（特に、慶大文学部の小論文で出題される文章は、発刊後一年程度の新書や単行本、文芸誌からの出題が多い）。また、例年本文要約の問題が課されているので、文章を読んで整理し、まとめる練習を積む必要がある。具体的には、学校の教科書や現代文の入試問題で扱った文章を 300～400 字程度で要約するといった練習が効果的だ。その際、単に本文の表現を抜き書きしてまとめるのではなく、自分の言葉を使って簡潔にまとめる訓練をしよう。